

1, 2回生とのワークショップ：共生の時と場を創る

望 月 佳重子

Workshops for the “Younger” Undergraduates : Creating Symbiotic Time and Space

Kaeko MOCHIZUKI

はじめに

2004年度（後学期）に担当した教養教育科目「外国の文化」では、アメリカ先住民が守り伝えてきた「創造神話と女性原像」を主題に取りあげた。ここでは伸びやかで充実したワークショップが実現し、学生も支援チームも運営教員の私も、おおむね心地よい時と場を共有した。むろん反省すべき問題にも、いくつか直面した。

したがって本小論は主に、上記の体験を全体的に振り返ることを目的とする。だが、その前段階として、第Ⅰ章でワークショップの「学外における私的前景」を少し描くことにする。ここでは、私が大学の外で見聞してきた協働・協遊の時場について語る。この前段階では、ワークショップの根源と原義に触れる私的体験を伝え、さらに現代の地方自治体・松山における実施事例を概略ながら示す。よって続く第Ⅱ章で、学内における「いちおうの成功例」を見ることになる。その結果、広く読まれていると聞く中野民夫のワークショップ案内書が記す「多様性を…豊かさとして活か [し] …一人ひとりの思いを相互作用の中で編み上げ形にしていく」（中野2004）実験を、愛媛大学の作業現場からの試みで支持できれば幸いである。

第Ⅰ章 学外における私的前景

1. 語源から現代語へ

ワークショップの原義である「工房」あるいは

「作業場」が、力強く落ち着いて生きている3つの場を、私は幸運にも15年あまり前に知った。1つ目は1988年のニューヨークで、大学院時代に女性学と少数民族文学の指導を受けたエスタ・ハイネマンが開いたワークショップである。ここでは詩の朗読、政治討論、自分史の語り等を通して、女性が客体の「女」から主体の「人」に変わるための意識啓発“consciousness raising”を学んだ。参加したアメリカ女性たちの多くは、自分がユダヤ人という少数民族に属している困難を、またその民族内部で女性である困難を、少しずつ語った。共感・支持・助言の身体表現と言葉が、語り手の大仕事に応じた。

このワークショップは政治的にも先鋭で、学ぶと、着実に動く。パレスチナ問題の平和解決を求め、西岸とガザ地区からユダヤ人入植者が撤退する案を早々と示した。ようやく最近2005年、その僅かが問題含みで実現した撤退を「ユダヤ系アメリカ人の大多数がイスラエルを援助する」（望月1988）国で呼びかけたのである。みんなでチラシを刷り、プラカードを持ち、ハイネマンの山荘からニューヨークの繁華街に出て、道行く人々と粘り強く議論した。

2つ目は、のどかな話である。ドイツ系アメリカ人のフレデリック・フォン・ヒューネという古楽器製作者が、自宅のワークショップを開放している。

（von Huene 1991）彼はバロック時代以前の管楽器（主にリコーダー）の有名な作り手で、私は1991年、自分の腕前に不相応な名器を、待つこと3ヶ月で作ってもらった。

楓やツゲや黒檀などの材が並ぶボストンの工房は、息子2人も古楽器職人で妻が総支配人なので、

ヨーロッパ中世の徒弟制より以上に閉鎖的な、他者を容れない家内工芸店かと思っていた。実際は鮮やかな現代のワークショップで、楽器の注文販売よりも、注文主のプロ演奏家、音楽学者、学生、下手な素人ふえふき、近所の聴き手たちを、賑やかに寄せ集めるサロンである。研究会やコンサートを開き、談論風発の食事会を楽しみ、ニュースレターを出し、ホームページを開いている¹⁾。

3つ目のワークショップは、カナダ先住民ヌートカ人の作家アン・キャメロンが住む農場にあった。彼女の小説『銅色の女の娘たち』の翻訳者として、私は農場が一種の物語工房であることを1992年の訪問で知った。キャメロンが親友と営むこの「ファニー・ファーム」は、近隣のカナダ先住民(セイリシユ人やトリングト人)たちの寄り合い所のみならず、フィンランド語やオランダ語への翻訳者たち、イギリス人やドイツ人の研究者たちが、休暇に集まる社交場として、またキャメロンが教える大学のゼミ生たちの避難所として、機能してきた。

レザークに押し込められて苦難の日常を生きるカナダ先住民の知は、この自分史・民族史ワークショップへの参加者に、分かち合い“sharing”を鍵言葉にして伝えられる。私的な問題を抱える女性には、ピア・カウンセリングによる援助と自主解決への試練が与えられ、この方法は小説にも描かれている。(キャメロン1991)白人のゼミ生は、社会構造と自分の脳ミソとに滲み込んだ白人優越主義を見つめ直し、多文化共生の実践に向かう。このワークショップで私は初めて、自分の父親像を再構築する方法を学んだ。

2. ワorkshop運営人：見習採用

20世紀末の国外ワークショップで時と場を与えられた私は、多様な他者の声に耳を澄まし、自分の考えや思いを人に伝え、自我を開いてゆく苦勞と快楽を味わった。しかし、この体験期間中は大体のところ受動的な参加者にとどまっていた。パレスチナ問題とリコーダーとカナダ先住民を結ぶ鍵概念は離散・平和・暴力と分かっていたが、数年間は考え込んでばかりいた。結局、自分自身がワークショップ運営に深く関わる側に行く機会を得たのは今世紀に入ってからで、松山市の男女共同参画推進財団「コムズ」が主催する祭においてであった。

2001年の秋、法文学部夜間主の卒業生で記憶に残

る明敏闊達な女性が研究室を訪れ、来春「コムズ祭」の分科会でワークショップを運営するので手伝ってほしいと言う。「家族って何？」というテーマである。彼女は、離婚女性の娘として「カッコイイク外^(ママ)で働く母」と共に暮らしている。その家庭で自分は「マジ満足」なのに、しばしば「ハズサレタリ」かわいそうにと同情されたりもして生き難いので、切実なテーマなのだと訴えた。

真の運営人は彼女なので私は助言者となり、半年かけて準備をした²⁾。彼女の他に2人の熱心な世話人が居たので、30人規模のワークショップには充分であった。3人とも既に、コムズの指導者養成セミナーで運営スキルの実習を終えていたので、本当は助言者など不要なだった。かえって私のほうが多くを見習う徒弟(徒姉?)となった。

当日、2時間の分科会のうち30分は「非血縁の同志が新ファミリーを創る」という内容で、私が話した。その後「島々」と呼ぶ4テーブルで8人ずつが30分わいわい議論し、各「島」が10分ずつ発表した。私が10分の論評をし、運営人と世話人が10分の「まとめすぎない、まとめ」をして会を終えた。これが私の国内におけるワークショップ原点である。

議論は、1999年に当時の文部省が制作配布した『家庭教育手帳・ノート』を資料に活発に行われた。『手帳・ノート』の主旨は、家庭教育への父親の参加促進である。同時に、外で働く勤勉な父親と内で働くエプロン姿の母親という家族の元で「健全な」子供たちを育てなさい、と漫画を多用し国民に説く。説に対して、パート労働者や独身や離婚経験者の女性たちが主旨との乖離を指摘し、違和感を表明。家族の問題は、こうした性役割分業の押し付けからも起こるのではないかと。

すると一人の女性が「私は毎日、主人のお弁当と自分のハラを痛めた5人の子のお弁当を手作りするのが、唯一最高の生きがいなんです」と発言した。生きがいは何であれ大概自由なのだけれども、多数派から日常的に支持されているらしい人の、自信と大声が怖かった。彼女には、さきほど私が「このワークショップも120分間の臨時家族ですから」で始めた演説がアイヌ語かギリシャ語に聞こえたらしいと推察したが、淡々と、を装って提案する。「それほど素敵な弁当づくりの技術、連れ合いさんとも分かち合ったらいかがでしょう」と。即座に「とんでもない、これは女の愛のお仕事で、まともで自然な

家族の絆は、この愛こそが…」と家業戦士は叫んだ。

他「島」の誰かが、やんわり言う。「なら、お宅の男の子さんたちとは、ぜひ分かち合うて。彼ら、学校の家庭科で弁当づくり習てるけん、世界の流れで」と。家業戦士は、いくらかおとなしくなる。分科会の終了後、運営人が「すごく、ためになりました」と笑い、ついでに、戦士に対峙した私の声が冷たかったのを「センセ、マダマダ、アオカッタ」と、からかった。第2「島」で発表者を務めた私の院生も「すごく、学びました」と、運営人と同様、笑って言った³⁾。それでも世話人たちが、ワークショップの記録と『手帳・ノート』の問題点とを文部省に書き送ることにしてくれたので、成熟したアクションも起こせた、と私は今なお強弁している。

3. DVワークショップ：定期雇用

先のワークショップ後、私は2002年の夏から家庭内暴力“domestic violence”(DV)について語り合う講師としてコムズに雇われ、今年で4年目になる。講座は「男女共同参画推進セミナー・人材養成基礎コース」で、市民のネットワークづくり指導者を増やすこと、前項で見たような会の運営人や世話人を育てること、を目的としている。

セミナーの題目は「性暴力に敏感になろう：性暴力は人権侵害です」である。夜間部と昼間部の熱心な受講生30名と2時間、講義にワークショップを織り交ぜている。DVは、内閣府による2002年の調査で、女性の「30%」(井上、江原2005)が経験者という現実であるにもかかわらず、極度に隠蔽されてきた暴力である。

このセミナーで私は、あまりの重荷に、よくつまずいた。昨年は夜間部の受講生に被害者が3人居て、その凄惨な語りに呆然とし、ただ耳を傾け、1時間でセミナーを閉じ、後は残ってくれた人々と聴き続けるしかなかった。複数回のDV経験者の場合、44.4%の女性が生命の危険を訴えているのに、DVは人を殺す暴力と実感できたのは、情けないことにこれが初めてであった。ただなぜか、まだ運営人をクビにされていない。

運営人に必要な資質は「ビジョンとアクション」(森田2002)の2つであるという。理念は本から学んでも、経験とスキルが足りなければ行動力が得られないことを、このワークショップで私は思い知った。セクハラは多く受けてきたが、DVは本当

に知らないのである。それでも結局、無知が負い目でこれ以上つらいワークショップはないので、変に居直ってしまい、その後はどのようなワークショップを頼まれても、あれよりは楽しいだろうと引き受けることにしている。

こうして学外でのワークショップ運営は「すごく」て、順風とは言い難いが、学内での運営に役立っている。共通教育科目では「英語C」に、専門科目では「基礎セミナー」「資料講読」「英作文」に採り入れ、まずまず楽しかった。サークルリーダー研修会の「危機管理論」ではセクハラについて語り合う機会を与えられ、今年の夏で3回目である。一方、専門のゼミは僅か1島から成る贅沢なワークショップと言えるから、毎週発表の相互作用の中で、学び合う地場を創り、幸せな思いをしている。

第Ⅱ章 いちおうの成功例

1. 学生と支援チームの反応

本論のワークショップ全体像を描く前に、受講生からの反応と、相互参観授業および公開授業の観察者からの反応を、面映ゆいけれども振り返る。学期末アンケートから、8人分の自由記述のうち4人分をそのまま引用し、他の4人分は内容が重複するので注に廻す⁴⁾。受講生数は25名である。

- (1) 皆で協力もでき楽しくできてよかったです。
- (2) グループワークをする授業があまりないので、今回この授業を受けて本当に良かったと思う。他の学部の人とグループワークができて、視野が広がった。
- (3) 授業中ヒマにならなくてよかった。
- (4) 様々な意見を聞いて、自分の考えよりもいいものがあるなとたくさん感じる事ができ、自分の視野も広がった点。人数がちょうどよかった。

長い引用であるが、協働による相乗効果が大きかったことが読みとれる。多様で異質な他者との出会いも新鮮であつたらしい。発表における質の高さに最も驚いたのは、私であった。最近の学生は他者とのコミュニケーション能力が不足と言われているが、それは必ずしも事実とは言えない。ただし第7週目までに5名が脱落したから、大成功にはほど遠い。

つまり、受付数30名の6分の1を支えきれなかったわけで、もっと工夫をすべきであったと反省している。

支援チームからの反応は、以下のようなものである。公開授業は第12週目、2005年1月24日、第1班による発表日で、テーマは「馬たちとアメリカ先住民」であった。前週、第5班による発表を参考にできたので、今週の第1班は余裕をもって出演した。チームリーダーの論評は「興味深い授業」で、学生たちが「それぞれ積極的に参加していた」という親切なものであった。

チームリーダー自身、授業の傍観者ではなく積極的な参加者であり、発表班に対してテーマを支える質問をしてくれたことが画期的であった。質問はハンドアウトの絵の「上下にある十字架模様は何を意味するのでしょうか」で、馬の持ち込みにキリスト教の押し付けが伴った先住民史を、さらに考える機会に繋がった⁵⁾。

学生たちは目立ちたがりが多かったので、授業公開にも快く応じた。だが、ビデオ撮影者を含めて4人の見学者に観察されることに、多少のストレスは感じたであろう。にもかかわらず、見られる側と見る側との関が低かったことは、工学部の学生が後で述べた「あのお客さんらは、よかった」という感想から伺える。

次の反応は相互授業参観および継続的な意見交換を行った教員からで、学生たちが「のびのびと楽しそうにワークショップをしているのが印象的」というメールに要約できる。そもそも当該教員は、公開日に第5班の「島」に飛び入りし、少しも抑圧的でない博覧強記ぶりで島民に衝撃を与え、先住民が初めて見た馬を表現した「魔術犬」“medicine dog”論議で島民の知を刺激した。後で学生たちは「あの一と、スゴイ」と言い、教員は自分が「楽しく勉強しました」と言った。

もう1つの反応は、支援チーム・トップからで第1点「授業を3部構成にし」その結果、発表を1セッションにつき1グループに限定しているのは、どの班も集中できて良いとのメールであった。3部構成は後で詳述するが、(1)発表準備とリハーサル、(2)資料の協働読解、(3)発表と質疑応答、である。

第2点は、発表班の自己紹介がモタツイタことで、対処法を示唆された。第3点は「全体的に」面

白いワークショップであったとのこと。第4点は「教員の相互授業参観に抵抗感が強い…が、確かに多くを学ぶ機会である」と。第4点については、誰の授業にも多くの失敗や欠点があるのは当たり前であるから、公開して他者に批評してもらうのが良いと思われる。参観者は、良い点を多く見つけるようにし、公開者にそれらを伝え、自分の仕事に採り入れる。問題点のほうは大目に見つつも、少しは指摘する。この大人のマナーを、教員は学ぶことができるし、その結果、相互参観は大きい成果を生むであろう。

第5点は、私が5つのグループ間を徘徊して学生たちと話すときの位置についてで、これは無意識だった。「しゃがんで、目線の高さを学生のそれと合わせていた」のが良かったらしい。確かにワークショップは講義形式よりも双方向性を実現しやすいが、運営人の中央集権は、複数の運営人を交代で廻しても、しょせん揺るぐものではない。それでも、より少なく権威主義的な目線は必要である。上からモノを言わない低い目線は、身体にハンディのある人や高齢者の車イスをのんびり押し、子供たちと必要以上に熱心に遊べば、誰でも自然に得られるであろう。

2. 全体、15週の流れ

ワークショップの始動から休眠までの15週を、時系列的に記すことにする。授業は新機軸の試みとして2004年10月4日(月曜、2限)に第1回目を開き、翌年2月14日に閉じた。科目番号368、講義棟23番教室。授業題目は序で述べたように「創造神話と女性原像」“Creation Myths and the First Woman”である。

〈第1回目〉

受講生の確定、ワークショップの「島」づくり、シラバスの説明、を行った。40名あまりが集まったので、人文学科の学生たちを説得して移動してもらうのに苦労した。確定した30名は、法文(12)、教育(4)、工(13)、医(1)の4学部からである。前にも述べたように、7週目までに5名(法文1名と工4名)が脱落して25名になった。しかし4学部の多様性は保たれたので、前項で見た学期末アンケートでの反応が示すとおり、この多様性はワークショップが良い結果を生んだ一因に違いない。

初回から5つの「島」をつくり、座席を定めた。まず、同一学部の仲間が集まってコチコチに固まっ

ているのを無慈悲に解体して、新しい6人から成る5グループをつくる。次に新人たちに、絶海の孤島に漂着した6人の異文化人、と自分たちをイメージしてもらおう。島民は協働して何とか「食料を採って、ではなくて、単位を取って」生存を、と伝える。この冗談を学生たちは理解したので、ひとまず解凍に成功。

シラバスの説明とワークショップの簡単な定義を行う。最後に、次回のための宿題を2つ課す。1つ目は、ハンドアウト(1)の写真3種類を見て、各「島」が質問を1つ考え、代表者が私に質問する。2つ目は、自己紹介のリハーサル。

〈第2回目ー第4回目〉

自己紹介をゆっくり行った。学生たちは各々自分の姓名について、(1)名が持つ意味を「名付け人が、あらまほしき像」として「かくかくしかじか」と込めてくれたらしい、という解説をする。(2)姓が持つ意味を「自然地理と」あるいは「職業と」あるいは「渡来の歴史と」関係があるかもしれない、と推測もしくは調査して発表する。(3)近未来、遠未来の自分の夢を語る。

全5「島」が初めてのハンドアウトについて質問を1つずつ披露し、3回かけて私が答えた。例えば「サン・イルデフォンソ・プエブロ民族のダレーヌ・マルチネスさんは、顔が私たちによく似ていますが、なぜでしょうか？」とか「ナバホ民族の少年ダンサー、エルドンさんの垂れ垂れイヤリングは、水晶でしょうか、トルコ石でしょうか」などの質問は楽勝だった。だが「コヨーテは時速65 km で走るとありますが、アフガン・ハウンドのほうが俊足なのは」には答えられなかった。後で調べたら、差は微妙らしい。

次からは「コメントか質問か、どちらかを」と課したほうが、運営人が答えに詰まる危険度が減ると考えたが、考え直して質問のみにした。コメントは、質疑応答の後、あれこれ出てくる。それにゼミ生たちが日頃、質問をつくるほうがコメントするより3倍は頭を使うと嘆いていたのを、思い出したからである。

背景説明のため、地図と歴史を載せたハンドアウトを使う。1492年、コロンブスが「インド人」と間違えた民は当時およそ2千万で、現在2百万。激減の理由と過程を述べ、現在それでも約500民族が多彩な神話を保持していると語る。そのうち2民族

「ピマ人」と「ラコタ人」の神話をテキストに選んだ理由などを伝え、導入部を終えた。

〈第5回目〉

自己紹介を終え、落ち着いたので、初回に配っておいたブランクのシートマップに島民の姓名を各自で書き込んでもらう。自己紹介は、もう少し簡潔になるよう運営人が工夫して、第3回目までに終えたほうが良かったと思う。

テキストの読解とその内容についての議論を中心に、神話テキストの協働読解、読解のミニ発表、背景の説明（運営人による）、テキストについての質問づくり（運営人に対してではなく、他島に対しての質問である）、朗読、運営人への質問（もし有れば）から成る通常型セッションを開始。早くも、なぜ英語で読むのかという根元的な質問が出たので、私は次のように説明した。500以上の言語を持つ民族群が今、共通の受難史と独自の文化を英語（皮肉にも侵略者の言語なのだが）で語り合うという歴史上初めての連帯により、財と誇りの回復を目指しているからと。

第6回目、前回に約束していた通り映像を見ようとした。ピマ人（正式にはアキメル・ウッドハム人＝川の人）の故郷アリゾナ（アメリカ南西部）およびラコタ人の故郷ダコタ（アメリカ北西部）における、生活と風景を見るためである。写真・本・絵葉書・装飾品などを多く持ち込み、研究室のOHCをゼミ生に運んでもらった。結果は、OHCが接続不可だったので、私が各島で紙芝居もどきをした。島民は、先生が気の毒だからという風情で、ご祝儀質問を多発した。中間アンケートの自由記述からは、ワークショップを楽しみはじめた様子が窺える⁶⁾。

第7回目、前回の傷を癒そうと急遽ビデオを見ることにする。今度は、またゼミ生を酷使して器機使用リハーサルもして、万全。ビデオ「アメリカ先住民：見えなくされた民」“Native Americans: The Invisible People”は英語版しかないので、内容説明を事前にした。結果は、3分の2が、ぐっすり寝ていた。英語が早くて難しすぎたらしい。しかし、このころまでに島民は、互いに優雅に挨拶するようになり、机やイスを動かしての島づくりも何となく誰かれとなく、交代でするようになった。

第8回目、英語の朗読が上手になった。たまには日本語のテキストも、ということでネズ・パース民族がコヨーテを歌った極めて短い詩「守り神の歌」

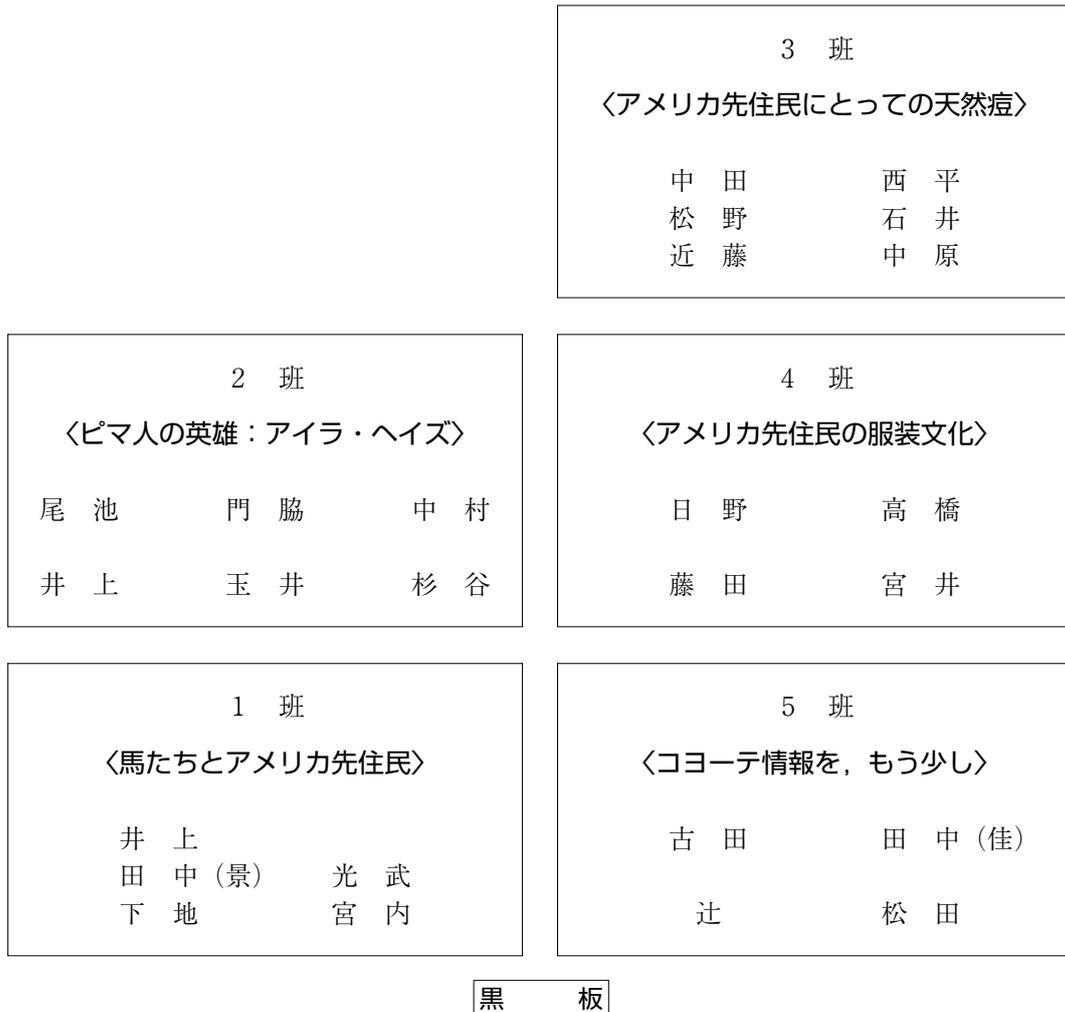


図 プレゼンテーション主題 シートマップ

2005.12.20

(金関1992)の朗詠法を各島にまかせる。ソロ、斉唱、合唱、コール・アンド・レスポンスと、多彩な朗詠法を相談して編み出した。声を出す身体を良いものと確認し、嬉しそうであった。

〈第9回目－第10回目〉

テキスト読解のワークショップは、主題を創造神話から女性を尊敬する文化に移し、開いたままとする。発表に向かってのスケジュールを確認。発表テーマの登録・相談・修正を今回と第10回目とにおいて行う。冬休み中に資料収集ができるからである。確定したテーマは図に示した通りで、もともと各班がテーマ候補を2つ立て、他班と重ならないよう調整した結果である。休み明け、第11回目(1月17日)から1セッションにつき1班の発表というペースを約束。

この時期、ハンドアウトの手本を回覧。手本は2年前「基礎セミナー」の学生がつくった中から、3

種類を選んだ。1つ目は「王女ポカホンタス：映画と史実」で、2つ目は「ナバホ民族の文化回復」である。3つ目は、あまりに気宇壮大すぎるテーマだったので渋々承認した「3つの民の離散(Diaspora)：出エジプトと黒人奴隷船と涙のふみわけ道」である。この3つ目も思いのほか島民に感銘を与えたようであったが結局、テーマの絞り込み方を、前者2つから学んだようであった。

〈第11回目－第15回目〉

通常型セッションを発表型セッションに切り換える。神話テキストの協働読解、読解のミニ発表、朗読、背景の説明(運営人による)は、通常型のままワークショップBとする。テキストについての質問づくりを省略して、発表準備を最初に置きワークショップAとする。発表を最後に据え、これは他班からの質問づくりと発表した班からの応答を含む。

この章の前項と呼応するので、公開授業の板書を下に示す。

1 月24日(月)12回目：今日の展開

I ワークショップ A 〈プレゼン準備〉

1. 1 班：本日出演のためのリハーサル
2. 2-4 班：発表用ハンドアウトの作成と議論
3. 5 班（プレゼン終了班）：テキスト“White Buffalo Calf Woman”読解

II ワークショップ B 〈テキスト読解〉

4. 全班：協働読解
5. 5 班：読解のミニ発表
6. 全員：朗読

III プリゼンテーション〈1 班による〉

1. テーマ：「馬たちとアメリカ先住民」
2. 他班による質問づくりミニ・ワークショップ：1 班は休息
3. 疑応答による発表のフォロー

時間の配分は、5 分のゆとりを入れて、おおよそ I のワークショップ A：15 分、II のワークショップ B：25 分、III のプレゼンテーション：45 分である。

前週と次週以後の他班による発表も、質疑応答が活発で充実していた⁷⁾。発表は驚くほど硬派の内容が多かったが、ユーモアも溢れていた。むろん、いちばん楽しんだのは私である。運営人はワークショップを絶対に深刻に仕切ってはならず、自分自身が楽しみ、参加者がくつろげる「ユーモアと浮き浮き気分」(Sharp 2000) が肝要、という助言がある。この助言は、学外では努力したわりに役に立たなかったが、学内で活かすことができたようである⁸⁾。

おわりに

本ワークショップにおける最大の反省点は、私の出番のとき、多すぎるハンドアウトの説明を早口で行ったから、学生に重荷だったかもしれないことである。精読用の神話テキスト 4 頁に背景説明 14 頁では、島民は「ヒマにならない」のではなくて「ヒマになれない」のだったかもしれない。しかし号外 4 頁は、例えば「母系制って、どんなシステムですか」とか「イオージマは、太平洋のどこらへんですか」といった常識に接近する質問への、答えと関連資料

であったから、自業自得なのだった。

次に、受講生の学年分布と「世話人」について記しておく。シラバスには「原則として 1 回生」としたが、1 回生は 20 名、2 回生が 4 名、3 回生が 1 名であった。私のゼミ生（3 回生）はクラスで唯一のワークショップ経験者であり、学生間を調停し運営人を手伝う世話人を、上手に務めた。発表の順序を第 5 班からにしたのは、彼女が居た班だからである。彼女はまた、同班で脱落しかけていた 1 回生を辛抱強く支えた。したがって、数的に最大限度と思われる 30 名⁹⁾のワークショップには、院生か上回生の TA・世話人が 2 名ほど居ると良いと思う。作業現場で実際的な手本を示すことができるし、助け船も出せる。世話人たちも、運営法を学ぶことができるであろう。

全体としての結論は：(1)若い 1, 2 回生のうちに、(2)学部を超えて多様な文化背景を持つ学生が集い、(3)協働する楽しさ・苦しさとマナーを学び教え合うのが良い、の 3 点につきる。くどいけれども同じことを暗く言うと：[1] 教員が出す一方向的な指示に受動的に従ってきた学生が、[2] 同一学部、同一学科といったホモジニアス過ぎる環境で長く学ぶと、[3] 自分のコピーのような仲間だけと群れるか、孤立し自閉するかして、摩擦や意見の対立を経験した後の妥協や譲り合いに無縁のまま、かつ思考力不足で礼儀知らずの幼稚系のまま、という卒業生が少なからず出る。

幼稚系と対照的に、多様な他者との出会いで力を得て共生に向かい、矛盾だらけの自我を外に開いた学生は、自分を好きになるし他者に優しくなる。ハンドアウトを 4 つに畳んで「どっかに挟んで忘れて来ました」と告白した学生も、美しくファイルした人や製本した人に助けられ、次第に目がきらきらした能動人間に変わったのを、本ワークショップで私は見た。

むろん閉じたワークショップで不適切な集団主義が行われた場合、怠けて遊び続けるか、反対にカルトに走るか、の 15 週になる危険が生じる。しかし運営人が、授業そのものだけでなく準備・情報交換・公開・論評の全過程を、支援チームと他教員との協働で成るワークショップ、と頭を切り換えて楽しめば、さらに豊かな相互作用を実現できるに違いない。全セッションをワークショップで運営する必要はないかもしれないから、まず 3 分の 1 あるいは半

分ほど、採り入れて試す価値はあると思われる。

(5) ワークショップはとても楽しい授業です。

2005年1月24日(月)

抜き書き：山内和美チームリーダー

注

- 1) <http://www.vonhuene.com/>
- 2) ワークショップ業界の用語は、出自のせいもあるが、あまりにもカタカナ語が多い。もう少し誰にも分かりやすく、誰もが簡単に使えるよう、この小論では行為者を下記のように翻訳しておく。
ファシリテーター：運営人
コーディネーター：世話人
アドバイザー：助言者
コメンテーター：論評者
- 3) この院生の第2「島」には吉村典子館長が飛び入り参加し、世話人を引き受けた。同年9月、院生は「コムズ」主催の「赤松良子講演会」において、講演者である元文部大臣との対談相手に抜擢された。題目は「意志決定の場への女性の参画を促進し、ワタシたちをエンパワーするために」である。ワークショップは、その場限りで息の長い継続が困難という欠点があるが、注意深く人材を選んでネットワークを維持できた、このような例もある。
- 4) (5) グループワーク学習という方法がとてもよく、他学科の学生とも交友をきずけたので、ほんとうに楽しい授業でした。
(6) I had fun. Thank you.
(7) 来春もこのような授業をお願いします!!!
(8) 毎回ワークショップをつくることにより、グループ内でいろいろな意見を出すことができてよかった。講義形式では、他の学生とコミュニケーションをとることはあまりないが、ワークショップ形式にすると新しい友人ができてよかった。ワークショップで自分の意見を言い、また他人の意見をきいて、その内容を議論することは、授業内容の理解に大きく役立つと思う。専門の授業でそれがなされることはあたりまえだが、共通教育という授業で、自分の専門外のことを他の学部生もあわせて行うことは、豊かな経験になると思う。
- 5) 姿勢も、立ったまま「観察」するのではなく、学生たちと同じイスに座っての「参加」であった。
- 6) (1) THE WELL BAKED MAN は今まで読んだことがなかったので、毎回とても楽しいです。各自で訳してくるのではなく、WORKSHOPで協力して訳するというスタイルが、ただのレクチャーではなくて良いと思います。
(2) ゆっくり進んでくれるので分かりやすい。
(3) 復習を丁寧にしてくれる点。
(4) 今までに受けたことのない面白い授業です。

7) 5つの班がつくったハンドアウトは、いつでも閲覧に応じる。

8) 本ワークショップの簡単な事例報告を、下記の手引に記している。

愛媛大学・学生支援機構教育開発センター（編）
（2005）『愛媛大学FDハンドブック：もっと!!授業を良くするために』Vol.2：55.

9) 経験した最大数のワークショップは、90名である。日時：2003年8月20日(水)10：30-12：00。場所：新居浜市市民文化センター。研修会テーマ：「男女参画の意識づくり」。参加者：新居浜市小中学校教職員。1列に6人だったので、奇数列に後を向いてもらい12人を1班。残りは適当。20分の議論。「グループ・ワーク」名人の校長・教頭先生たちだったので、心配したほど困難ではなかった。

文 献

- アン・キャメロン（1991）『銅色の女の娘たち』（1981）学芸書林，198-200.
- 井上輝子・江原由美子（編）（2005）『女性のデータブック，第4版』有斐閣，56.
- 金関寿夫（編・訳）（1992）『おれは歌だ，おれはここを歩く：アメリカ・インディアン詩』福音書店，no pagination.
- 中野民夫（2004）『ワークショップ：新しい学びと創造の場』岩波新書，158-159.
- 望月佳重子（1988）「パーク・アヴェニュー，5-5：さわやかな政治集会に加わって」『週間読書人』第1759号.
- 森田ゆり（2002）『多様性トレーニングガイド：人権啓発参加型学習の理論と実践』解放出版社，260-264.
- Sharp, Peggy A. (2000) "The 'Never Ever' of Workshop Facilitation." *Tools for Schools*, Dec/Jan : 3.
- Von Huene, Ingeborg. (1991) "Personal Letter to Mochizuki." March 21.